

平成 26 年 8 月 2 日

## 中南米ビジネス・セミナー 安倍内閣総理大臣政策スピーチ

皆さんこんにちは。安倍晋三でございます。

今日この場で、このたび講演させていただくことを大変光栄に思います。

中南米で続けてきた旅は、ここサンパウロで締めくりとなります。

よい機会ですから、皆様にお約束します。日本の総理大臣や閣僚は、お国ブラジルや、中南米の国々に、もっと頻繁にやってきます。

外務大臣はもちろん、財務大臣や経済産業大臣など、入れ替わり、立ち替わり、中南米の国々に、顔を出せるようにします。

そうすることによって、お国の皆様をはじめ、中南米の国々と、日本は何をしたいのか？

それを 3 つにまとめて、ポルトガル語に、いえ、拙いポルトガル語にしてみましたから、お聞きいただきたいと思います。

プログレジール・ジュントス（progredir juntos・発展を共に）、リデラール・ジュントス（liderar juntos・主導力を共に）、そして、インスピラール・ジュントス（inspirar juntos・啓発を共に）。

どうやら通じたようです。

これら「juntos（ジュントス＝「共に」）」を、我が国の中南米外交における「三つの指導理念」と呼ぶことにします。これから日本は、中南米との協力に限りない深化をもたらします。その営みを、常に導く理念です。

日本とブラジルが、日本と、中南米の国々が、手を結び、心を通わせあって、時として苦勞を、また努力を、できるなら歡喜を共にすること、「juntos」の大切さを、私は強調したいと思います。

大きな声で言いましょう、日本とブラジル、日本と中南米、juntos!!

では第一の、プログレジール・ジュントスについてです。

言いたいのは何よりも、いまや力強い前進を始めた日本と中南米の間で、経済の結びつきを一層深めようではないかということです。

いわゆるアベノミクスはいま、大胆な金融政策、機動的な財政政策という第一、第二の矢に継いで、民間投資を喚起する第三の矢を、日本の深いところ目掛けて射ち続けているところです。

日本では、何十年に一度という変革が、たくさんの分野で始まっています。農業で、医療分野で、あるいはエネルギー産業で、私は、なにもものも恐れず改革を続けていきます。国と、社会を開き、女性に機会を与えるため、新機軸を打ち出し、努力を続けています。

そんな日本を、頼れるパートナーとしていただきたい。それがまず、私からの訴えです。

今度の旅では、日本から、経済界・各界のトップ・リーダーの皆さんに多数おいでいただいています。

プログレジール・ジュントスが、日本とブラジルの、日本と中南米諸国の企業家たちの間に花開き、互いに実りをもたらすことを、共に願おうではありませんか。

例えばアマゾン熱帯雨林の状態を衛星から監視するといった最先端の分野にも、協力の可能性が満ちあふれています。

そして日本には、特に産業人材の育成という面で、ユニークな貢献をする力が備わっています。

20年前、天に召されたアイルトン・セナは、もし生きていたら、そしてこの場にいてくれたなら、こうしたことのひとつひとつに、力強く頷いてくれたらと思います。

生粋のパウリスタ、セナがホンダのエンジンで疾駆した姿は、いまでも記憶に鮮やかです。あの、コーナーに向かって果敢に突っ込む勇気。鈴鹿のセナは、日本人の魂をわしづかみにしました。

そのセナが、ホンダについてこう言っています。

「ホンダの人たちは、理想に向かってすべての努力を傾ける。約束は決して違えない。技術の面ではもちろん、人と人との付き合いでも同じだ」

それが日本人と日本企業の、ほかにはない特色だと喝破したセナは、「日本と日本のファンは、私の心の特別な場所にいる」のだと言いました。

日本企業を、世の大方の企業と分かつもの。それは、工場の作業現場が、働く喜びを教える学校のような、著しい特長です。

「日本の企業だけが、労働とは何かという倫理を教えてくれた」という趣旨のことを、私に言ってくれたアフリカの指導者もいました。

ウジミナスの、日本とブラジルの合弁製鉄事業を指して、いつしか人は、「ウジミナス学校」と呼ぶようになりました。

造船の合弁、イシブラスでも、人材の育て方を称して「イシブラス学校」の名がつけました。

日本企業が、中南米経済の確かな一員となる時、そこにはあの偉大な女性詩人、ガブリエラ・ミストラルが詠った情景が現れます。

「一輪のバラさえ植える必要がなく、取り組むべき仕事の一つとしてないならば、世の中は、さぞや悲しい場所だろう」

労働とは、喜びであり得るのだと詩人は言いたかったのだと思います。日本企業がもたらすものは、まさしくこの喜びです。

いまや活力を復活させた日本企業は、中南米に向け、いつにも増して真剣な眼差しを注いでいます。

最新データによれば、日本企業の対外進出件数で、中南米は、ほかのどこより多い新規進出件数を示しています。

だからこそ、プログレジール・ジュントス。日本企業を、どうぞパートナーにしてください。共に、発展していこうではありませんか。

リデラール・ジュントス。

共に、何を、どんなふう、リードしていこうというのでしょうか。

そもそも中南米諸国とは日本にとって、いつも新しい地平線を開いてくれる国々でした。

日本が結んだ経済連携協定（EPA）の中でも、メキシコ、チリ、ペルーと結んだものは、いずれも初期の、しかも大いなる成功例です。その実績を踏まえ、これら3か国を含む、TPPの交渉に臨みます。

いまはまた、EPAをコロンビアと交渉中です。仕上がったあかつき、太平洋同盟加盟国のすべてと、EPAのネットワークができることになります。

歴史を遡ってみましょうか。

日本が近代化に向け格闘していたとき、平等な条件の条約を、日本といち早く結んでくれたのも、それから戦後、日本が国際連合に加盟する時、揃って賛成してくれたのも、中南米の国々でした。

皆さん、私は思います。いまや日本が、外交の地平を広げようとするとき、中南米諸国こそは、日本が頼りとすべきパートナーであります。

日本と中南米には、価値と、志における共通性があります。

あくまでも平和を希求してきた、歩みの一貫性。それから、自由を尊び、民主主義を大切に、人権と、法の支配を尊重する価値観。

日本と中南米が一緒になって、世の中を少しでも良くしていこうとするとき、これらが私たちの足腰を支えます。

トラテロルコ条約のことを思い出してください。非核化地域をつくる条約として、世界初の例でした。リオ・サミットが、気候変動枠組条約と、生物多様性条約に繋がったことは誰もが知っています。

日本はいま、お国ブラジルとともに、気候変動対策に役立つ議論を、途上国、先進国の垣根を越えて推し進めていこうとしています。「『気候変動に対する更なる行動』に関する非公式会合」を主催しています。

国際社会をポジティブな向きへと推し進める力として、様々な困難な国際課題に立ち向かうリデラール・ジュントスの、好個の実例です。

日本とブラジル、日本と中南米諸国は、地球を覆う課題と立ち向かうには、これ以上ない資格を備えていると、私は確信しています。

リオ・グランデから、リオ・デ・ラ・プラタまで、自由と、民主主義、人権と、法の支配を重んじる皆さんの生き方は、幾多の試練を乗り越えながら、常に一貫していたではありませんか。

私たち日本人は、そこにとても心丈夫なものを覚えます。だからこそ、リデラール・ジュントスでなくてはなりません。

これから我が国は、まさにこのことを主眼として、中南米諸国首脳の方々と、中南米諸国において、またあらゆる機会をとらえて、話し合っていくつもりです。

今度私は、世界の平和、地域の平和に、日本がもっと積極的に貢献できるよう、安全保障の法制度を整備することにしました。

ハイチに赴いた自衛隊の活動は、感謝と、称賛をいただきました。ハリケーン被害の救援に出かけたホンジュラスでも、自衛隊員は、感謝の歓呼に包まれました。

中南米での経験が私たちに与えてくれたものは、もう一度ミストラルを引くならば、「エル・ブラセル・デ・セルビール（奉仕の喜び）」だったのです。それがひとつの自信となって、いまや日本の旗印、「積極的平和主義」を掲げる決意が育ちました。

ブラジルの皆様に、中南米諸国の方々に、訴えたいと思います。世界から不幸を、危険を、法の蹂躪を少しでもなくしていくよう、ともに先頭を歩いて行こうではありませんか。

軍縮で、不拡散で、さらには環境問題で、「juntos」、一緒に働ける分野が、近年とみに増えました。あらゆる機会をとらえて協働し、世の中を、少しでも良い方向へと、一緒にリードしていこうではありませんか。

なんのためかといえば、私たちの、子や孫のためです。平和で豊かな世界を築き、残していくためです。

思えば、日本が中南米へ差し伸べてきた ODA は、累計で 300 億ドル以上に及びます。これが将来世代のための投資でなくて、なんだったのでしょうか。

日本人の本郷豊さんが、セラードで大豆がつくれると信じて、20 年以上も頑張れたのは、本郷さんがブラジルの若者に、未来の可能性を見たからに違いないと思います。見込みのとおり、ブラジルはいまや、世界最大の大豆生産国になりました。

セラード開発は、「不毛の大地」と言われた広大な土地を、穀倉地帯に変えました。大豆という温帯作物を、熱帯地域で立派に育ててみせました。何もなかったところから、食品加工のように、産業の一大バリューチェーンを作りました。

文字通り、日本と、ブラジルの協力が成し遂げた、世界史的達成です。しかもいまや本郷さんたち日本人と、セラード開発で経験を積んだブラジルの専門家は、土地柄が似たアフリカで、大豆の生育に取り組んでいます。夢の再現、まさしくインスパイラル・ジュントスではありませんか。

チリはいまでこそ、サーモンの輸出量で世界一を誇ります。しかし 40 年前、チリでサケを養殖しようと思った人は一人もいませんでした。

そんなとき、厳寒のフィヨルドで、努力を 15 年も続けた日本人がいました。現地で急逝した、養殖の専門家がいました。長澤有晃さんと、1972 年、50 代半ばの若さでサンティアゴに客死した、白石芳一さんです。

白石さんは、サンティアゴから 2000 キロも離れた奥地へ入り、サケを孵化させる設備づくりに奔走しました。

長澤さんにしろ、白石さんにしろ、中南米の大いなる可能性に、若々しい夢を追った方だったに違いありません。

彼らの志を継ごうとするなら、私たちに必要な心がけは、インスパイラル・ジュントスです。心と、心を、感動の絆で結んでいきましょう。

日本と中南米には、400 年以上にわたる、長い友好があります。そこに、新たないのちを吹き込んでいきましょう。若い世代のため、人と、人との交流を心がけましょう。

中南米の未来を担う若いリーダーたちとの絆を深めるために、交流事業を拡充していこうと思います。

早速本年度は、中南米の次世代リーダーと日系人 1000 人以上の方に、多種多様な交流プログラムを提供することとしました。

これを皮切りに、次世代同士の交流に役立つプログラムを広げて行くつもりです。

いま日系の方々のごことを申し上げます。

6 世代にわたって日系の皆さんが築いてこられた信頼こそは、中南米における、日本に対する信頼の礎です。日系の皆さんが忍んだ労苦を思う時、私はいつも、襟を正したい思いに駆られます。

「日系人次世代育成研修」と、「日系社会ボランティア」のプログラムを、それぞれ大幅に増やすことを、申し上げようと思います。

日系人の皆さんにお手伝いをいただきながら、中南米で、日本語教育にもっと投資することにしました。日本語を教える先生たちを、サポートします。ITを活用し、日本語教育の効率を上げていきます。

juntos の精神で事に臨むとき、私たちの協力が恵み深いものになると教えてくれたのは、昨年、2013 年の 4 月から 5 月にかけて起きたある出来事でした。

ブラジルの沖合、深い海の底に、「しんかい 6500」は潜りました。

「しんかい 6500」とは、6500 メートルの深海まで潜れる日本の有人潜水艇です。まだ見ぬ生き物や、海底の地層を探りに行った旅は、日本とブラジル双方の科学者たちが、知恵と、汗、努力を持ち寄った共同研究でした。

ブラジル沖の探査をリードした日本の学者は、振り返ってこう言っています。

「日本とブラジル双方から、違う文化を持ち寄った科学者同士に本当の友情が生まれたことが、一番の思い出だ」。

つまり juntos の喜びが、科学的発見にも増して大きな収穫だったと、日本人科学者たちは感じたのです。

さあ皆様に、「しんかい 6500」の栄えある乗組員をご紹介します。サンパウロ大学で海洋生物学を研究するヴィヴィアン・ペリザーリさんです。どうか皆様、拍手をお願いします。

ペリザーリ教授は、祖国の沖、母なる海の底まで潜ることは、15 年間追い求めた夢だったと伺いました。ご覧になった海面下 4000 メートルの海は、青く、どこまでも透き通っていたのだそうですね。

花崗岩の地層が見つかったというニュースは、もしやアトランティス大陸の一部かと、日本でも話題になりました。

そうであっても、なくても、ペリザーリ教授たちが juntos の精神で、日本の学者、専門家たちと、一緒に働いたということ自体、私は何よりもすばらしいと思います。ありがとうございました。

ここにおいでブラジルの皆さんと、私たち日本人との間には、格別の juntos があります。

ブラジルの皆さんには 2016 年、私たちにはその 4 年後に、オリンピックアードがやって来ます。若者の、祭典がやってきます。

東京は、リオデジャネイロから、夢のたいまつを引き継ぎます。リオでブラジルの、中南米の若者が見る夢は、そのまま東京にリレーされます。

それが、6 年後、2020 年です。

ここを一つの目途として、私は日本の若者に、どしどし世界に出て、外国の若者と触れ合うよう促し続けていきます。「Sport for

tomorrow」と名づけたスポーツ普及を助ける事業は、中南米でこそ、大いにやるつもりです。

「どんなに遠くにあると、そう見えたとしても」と、セシリア・メイレスは美しい詞にしました。

「どんなに遠くにあると、そう見えたとしても、あなたたちは、私の記憶に留まり続け、私の念頭に常にあり、私にとって、希望であり続けるだろう」。

アイルトン・セナと、ホンダの創業者、本田宗一郎は、メイレスが詠んだとおりの、魂の統合を培ったことを、私たちは知っています。距離は、二人を隔てませんでした。

発展を共にしましょう。世の中を良くしていくために、一緒に、ともに働きましょう。すべての土台として、魂と魂が触れ合って、深い共感を育てるよう、人と人との交流に、力を注いでいきましょう。

日本と中南米を結び、互いの協力をどこまでも深めていく、三つの指導理念です。日本と中南米、Juntos!!

Muito obrigado.